令和５年度

船越小

学校通信　第１１号
全校児童数　９６名
令和６年　３月　１日
久留米市立船越小学校
校長　園木　聖子

【学校の教育目標】未来の船越をつくる子どもの育成
【重点目標】つながりつなぎ楽しむ子どもの育成　【合言葉】つながりつなぎ楽しむ

地域学校協議会からの提言です

地域学校協議会とは、公立学校の運営に保護者や地域の皆様の意見を取り入れるための第三者機関です。構成委員は、地域代表者、保護者代表者、学校代表者で、本年度は、１３名です。会の目的は、次の三つです。

① 学校長の学校経営の方針を理解し、教育目標を共有する。
② 学校・家庭・地域が協働して教育課題解決のために行う取組を実働化させる。
③ 学校が行った評価結果の妥当性・信頼性について評価する「学校関係者評価」を実施する。

毎年、市立の全小中学校では、学校の教育目標の実現につながる「久留米市教育振興プラン」に示されている４つの重点「学びをつなぐ授業」「楽しい学校」「笑顔の先生」「協働する学校・家庭・地域」に沿って、「学校関係者評価」を実施し、その内容をお伝えしております。

本年度も、本校の教育目標を実現するための様々な取組に対し、学校が自己評価を行い、その評価内容に対して委員の皆様から「学校関係者評価」としてのご意見をいただきました。本年度は、子どもたちの様子を参観していただける機会を増やし、お会いできたときの話、学校や学級からの通信、日頃の子どもたちの地域での様子などをもとに、評価をしていただきました。○や●はいただいた評価、→◇は改善策です。

１　「学びをつなぐ授業」について

○　小さなステップに分けての授業で、子どもの思考をよく促せている。
○　考えをしっかり表現できている。
○　自分の考えを持ち、友達との交流を通して、深めたり発展させたりする学習活動は、とても大事。これからも、継続してほしい。
●　特別活動での話し合い活動を充実させることで、教科での話し合いもさらに充実を図れるのではないか。
●　授業で理解したことが日常生活でいかされるよう、サポートが必要。
○　ＩＣＴが教材の一部になっていてわかる授業につながっている。
●　情報の良し悪しを判断して教育活動にいかすための情報教育の充実が必要。
●　感染症で自宅待機をしている子どもが端末で授業を受けられるようにすることが、「わかる授業」につながる。

→◇　「考えを持つ→他と比べる→考えを見直す→考えをいかす」の基本的な学習過程を大切にし、「子どもが楽しさを味わえる授業づくり」をしていきます。
◇　自宅待機の子どもが授業に参加できるようにすることも含めて、一人一人の「わかる授業」を展開するためのＩＣＴ活用を目指します。

２　「楽しい学校（安心・安全な学び舎づくり）」について

○　友だちのよさを感じる心が育っている。
○　「学校が楽しい」と答える子が９７％というのが素晴らしい。３％の子にも、学校の楽しさを味わってほしい。

●　今後も縦割り活動を重視して、高学年の子に集団活動をリードすることの難しさと楽しさを体験させてほしい。
●　学年が上がるなどの環境の変化に気を付け、いじめや不登校を見逃さないようにすることが大事。
●　自分からあいさつができる子どもに育ててほしい。
→◇　船越小のみんなが学級の中でも異学年の中でも安心して過ごせるよう、年間を通して、「自分もまわりの人も大切にすることを意識した人間関係づくり」・あいさつも含めたコミュニケーション力の育成に取り組みます。

３　「笑顔の先生（子どもと向き合う時間の確保）」について

○　学校の教育方針に基づいて真面目に指導している先生が多い。
○　子どもが授業内容に興味を持つように、これからも工夫を続けてもらいたい。
●　先生方の課題解決ができ、「やってよかった」と思える検証授業の積み重ねが重要。評価指標に教師の自己評価も必要。
●　授業の内容や進め方がより適切になるように、検証してほしい。
●　明るく風通しのよい職場環境を目指して、今後も業務改善が必要。
→◇　「子どもが楽しさを味わえる授業」を目指して課題を意識した授業研究を進めていきます。
◇　これからも、子どもと向き合う時間の確保に向けて、アイディアを出し合い、業務の目的・内容・方法を見直し、精選していきます。

４　「協働する学校・家庭・地域」について

○　チェックシートや声掛けで促すことは、家庭学習の習慣をつける上でよい機会になっている。
●　家庭学習の時間や量を一律に設定するのではなく、個人の能力に合わせて設定することが必要ではないか。
●　宿題をしてこなかった子どもへの対応の工夫も必要。
●　家庭学習の習慣化を図るには、下校以降の生活時間の時間配分を各家庭で子どもと話し合う必要がある。
→◇　宿題について、発達段階に応じた出し方の工夫をします。例えば、漢字については「『授業で確かめた書き方・読み方を覚える』ことを目的とし、覚え方・そのための時間は、その子の力に任せ、定期的に『正しく覚えているか』を確かめる小テストを行い、その都度成果物を家庭に返すことで、進捗状況を共有する」というような工夫をしながら、やる気を引き出せるようにします。
●　メディアから切り離すことは難しいが、ゲームより楽しいと思える物事が子どもにあれば、必然的にゲームの時間は減っていく。家庭で工夫して、家族間、親子間で共通の趣味をもち、一緒に楽しむ時間を過ごすことも考えられる。
●　子どもの睡眠時間の確保も意識する必要がある。
→◇　子どもたちが安心してノーメディア時間を過ごせる校区コミュニティセンターの催し物など、メディアから離れたところで楽しさを味わえるよう、一層の働きかけをしていきます。
◇　学級懇談会の中で「親子ふれあい」の内容を共有できる場を設定し、「連携カード」の取組を広げられるようにします。
◇　「中学校人権のまちづくり」に関しては、学力向上の土台となる生活実態や多様化する保護者の要望等についても目を向けながら、「あらゆる差別をなくす環境づくり」に取り組んでいきます。

委員の皆様、貴重なご意見をいただき、どうもありがとうございました。これからの学校経営に活かしながら、連携する「地域に開かれた学校」から協働する「地域とともにある学校」へと歩みを進めてまいります。
今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。